

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2022年9月15日

夏は怪談。あなたの知らない世界。

皆さんは、こわい話は好きですか？暑い夏を涼しく過ごすため欠かせないものと言えば、クーラー、かき氷、そして怪談ですね！（独断）9月も半ばとなり、やや時機を逸した感がありますが、まだまだ続く残暑の中に涼を求めて、今回はこわい話をしていきます。

江戸時代、千住の通新町（とおりにしんまち）に夫婦で営む居酒屋がありました。客が十人も入れればいっぱいになってしまうような小さな店でしたが、酒の質が良く、量が多い（注1）ので、そこそこ繁盛していました。

その店の常連客に、八百屋のお爺さんがいました。八百屋と言っても、店を持っているわけではありません。天秤棒（てんびんぼう）をかついで方々を商売して歩く、行商です。このお爺さんには変わった癖がありました。店に来ると、酒を一杯、二杯ではなく、半分ずつ注文するのです。茶碗に半分注がれた酒をうまそうに飲み干すと、また「もう半分」と注文します。

ある晩のこと、客もはけて店を閉めようかという時分、お爺さんが一人で店にやって来ました。変わりばえのしないみずぼらしい格好ですが、今日は薄汚れた風呂敷包みを持っています。包みを傍らの腰掛けの上に置き、いつもどおり「半分ください」と酒を注文するお爺さんに、主人は「お爺さんはどうしていつも一杯ではなく、半分ずつ注文するんだい？」と、以前から気になっていたことを尋ねました。するとお爺さんは、「あたりは酒以外に楽しみはありません。酒は一杯ずつ三杯飲むよりも、半分ずつ六杯飲んだ方が余計に飲んだ気になれます。そういう意地きたなさで、半分ずつ注文するのです」と笑うのでした。

ほどよく酔ったお爺さんが帰った後、片付けをしていた主人は腰掛けの上に風呂敷包みが置き忘れてあるのに気づきます。開けてみるとそこには五十両という大金が入っています。慌ててお爺さんを追いかけようとする主人を、女房が引き留めます。「五十両あれば表通りに立派な店が持てるよ。あんたと私が黙っていれば金をネコババしたことは誰にもわからないのだから、忘れ物など無かったことにしまおう」最初は驚いて反対した主人でしたが、女房に強く押し切られ盗みに同意してしまうのです。

そこへ息を切らせてお爺さんが戻ってきます。店に風呂敷包みを忘れたと言うお爺さんを、そんなものは知らない、と女房は冷たくあしらいます。お爺さんは必死で食い下がります。「自分は以前、かなりの八百屋を営んでいたが、酒好きが原因でしくじって、店を失い、けちな行商の八百屋になった。そのころよちよち歩きだった娘が今年二十歳になり、年老いて行商に歩く父親を不憫（ふびん）に思って、自分が吉原の遊郭（ゆうかく）に身

を沈め、店を出すための五十両という金をつくってくれた。それなのに自分は、その金を、酒に酔ってこの居酒屋に忘れてしまった。金が出てこなければ、自分は生きて娘に顔向けできない。後生だから金を返してくれ」

お爺さんが泣いて懇願しても、主人と女房は知らぬ存ぜぬで相手にしません。終いには、棒でお爺さんを殴って店の外に追い出してしまいます。お爺さんは額から血を流し、むせび泣きながら「ひでえことしやがる、ちくしょう、覚えてろ！」と捨て台詞を残して去ります。

さすがに良心の呵責（かしゃく）を覚えた店の主人は、思い直して風呂敷包みを手にお爺さんを追いかけます。主人がその姿を目にしたとき、すでにお爺さんは隅田川にかかる千住大橋の欄干のうえに立っていました。主人に気づくと、お爺さんはその顔をじっと見つめ、そのままドボンと飛び込んで、川底に沈んでしまったのです。

居酒屋の夫婦は、盗んだ金を元手に表通りに広い店を構え、人を雇って商売を始めました。商売は繁盛し、夫婦の間には初めての子どももできました。月満ちて生まれたのは男の子、しかし、その顔はしわくちやで白髪頭、目がくぼんで頬のこけた、例のお爺さんそっくりの赤ん坊です。女房はその顔を一目見るなり悲鳴をあげて倒れると、そのまま息を引き取ってしまいます。

後に残された主人は、赤ん坊を育てるために乳母（うば）を雇いました。ところが、不思議なことにこの乳母が、一日、二日のうちに皆やめていってしまいます。理由を尋ねても誰も口をつぐんでわけを言いません。ようやく一人の乳母が「そんなに言うなら、今夜一晩だけ私が坊やと添い寝をしますから、旦那様はふすまのすき間から見ていてください」というので、言われるがまま、主人は隣の部屋から中の様子を覗くことにしました。

夜も更けた午前二時ごろ、主人が息を殺してじっと見ている目の前で、すやすや寝ていた赤ん坊が突然すくっと起き上がり、ちょこちょここと行燈（注2）に近づくと、わきに置いてあった茶碗に行燈の油を注いで、ペチャッ、ペチャッとなめ始めました。主人が、驚きのあまり怖さを忘れてふすまを開け「こんちきしょう！」と殴りかかろうとしたとき、赤ん坊はふっと振り向いて、茶碗を差し出すとこう言ったのです。「もう半分くださいな・・・」

どうですか？怖かったですでしょうか？

今、心の中で「何これ？ぜんっぜん怖くねーし！」とつぶやいた人、君たちには近々もれなく、「もう半分」のお爺さんから天罰がくだるので覚悟しておいてください（笑）。

冗談はさておき、この話は、実は落語の「もう半分」という怪談にもとづいています。落語というと滑稽な話や笑い話を思い浮かべるかもしれませんが、江戸から明治期につくられた、いわゆる古典落語は、人情話や社会風刺、男女の色恋の話など、実に多様なジャンルにわたっています。中でも怪談は当時の庶民たちに人気で、夏になると寄席の演目に怪談が掛かり、人々は夕涼みがてら寄席を訪れ、ひとときの涼を楽しんでいたようです。

「もう半分」は、実際にはもっと長い話です。昭和の名人、古今亭志ん朝の「もう半分」では、うまそうに酒を飲みながらお爺さんが語る身の上話、金をお爺さんに返そうとする亭主を叱咤して盗みに同意させる女房の強欲、娘が苦界（くがい）に身を沈めてつくった大切な金を置き忘れたお爺さんの焦りと後悔、金をネコババされたとわかったときの身を

よじるような悲憤が真に迫って演じられ、最後の「もう半分…」というオチにつながります。筆者のつたない筆力では、その怖さや不気味さ、おもしろさの1%も伝わっていないと思うので、興味のある人はYouTubeなどで検索して視聴してみてください。

怪談や不思議な話は、時代や場所を問わず、常に人々の身近にありました。

平安時代に成立した『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』には、鬼や妖怪、幽霊が登場する話がたくさん登場します。江戸時代に上田秋成が著した『雨月物語』は、遠国で囚われの身となった男が、友人との再会の約束を果たすため自刃して靈魂となって現れる「菊花の約（ちぎり）」や、数年ぶりの帰郷で妻と再会した男が、翌朝、妻の墓を発見し、死んだ妻が幽霊となって自分の帰りを待っていたことを知る「浅茅が宿」など9編の怪談がおさめられています。日本を愛し、日本の文化に魅せられた小泉八雲ことラフカディオ・ハーンは、妻から聞いた伝説、幽霊話を『怪談』としてまとめました。「耳なし芳一」や「むじな」の話は君たちもよく知っていると思います。日本民俗学の祖、柳田国男が「遠野の人佐々木鏡石君」から聞いた話にもとづいたとある『遠野物語』では、山の神や山男、オシラサマ、ザシキワラシ、河童や天狗、人魂など、岩手県遠野地方に伝わる299編の靈異譚が語られています。

人間は、怖いものや不気味なものを遠ざけようとする一方で、恐怖や不思議を求めてしまう、という正反対の性質を持っている気がします。先ほどの「もう半分」の枕（注3）で志ん朝師匠も「科学的な話ってなあ面白くない。非科学的な話だから面白いんです」と言っています。古来、人には理屈では説明のできないもの、不思議で奇妙なものに惹かれる本能のようなものがあり、それが豊かな想像力と結びついて、数え切れない怪談を生み出してきたのだと思います。

そうした怪談は、どこかに人間が投影されています。物語の原点には、人の情念や性（さが）が存在しています。『東海道四谷怪談』のお岩は、愛していた夫の裏切りにより毒を盛られ、顔が醜く崩れて死んでいきます。そして、その愛の深さが、そのまま憎悪の深さとなって夫を祟り殺すのです。日本各地に伝わる「幽霊子育て飴」は、飴屋に毎夜若い女が訪れて飴を買っていくという話です。実は、この女は、死んだ後に墓で産み落とした赤ん坊を養うため、幽霊となって飴を買い求めていたのです。怖さと同時に、死んでなお子を思う母の愛が悲しく心をうちます。

怪談には、どこかに日本人が共有するメンタリティー、郷愁のようなものを呼び起こすはたらきがあるように思います。テレビの画面から超ロングヘアーの女性が這い出してきたり、廃屋の中でパンツ一枚の白塗りの男の子が体育座りしていたりしなくても、怪談はぞっとする怖さと豊かな魅力をそなえています。

出典を忘れてしまったのですが、怪談が怖いのは「本当にあったこと」として語られるからだ、という文章を読んだことがあります。たしかに「ねーねー、これからボクの考えた、すっごく怖い話するから聞いてくれる？」とか言われても、ちっとも怖くありません。

「こんなことが、もしかしたら本当にあったかも」と思える、筆者の心に残る怪談があります。これまた出どころがうろ覚えで申し訳ないのですが、記憶違いでなければ、稲川

淳二さん（注4）の怪談ではなかったかと思います。

太平洋戦争中、南方の島々では日米両軍による激戦が行われました。装備に劣るうえに補給路を断たれた日本軍は、米軍の圧倒的な物量の前に敗戦を重ね、一つの島の守備隊が全滅する“玉砕”の悲劇も起こりました。これは、そんな南方戦線で一人の日本兵が経験した話です。

彼の部隊は、南太平洋にある小さな島で戦っていました。島全体が戦場となり、昼も夜も銃声や爆発音が鳴り響き、銃弾、砲弾が飛び交う激しい戦いが繰り広げられました。そんな激戦の中でも、ある一瞬、すべての物音が途絶える瞬間があるのだそうです。銃声や爆発音がいっさい消えて、島は穏やかな静けさに包まれます。偶然がもたらすそんなひとときを、島の兵隊たちは“天使の時間”と呼んでいました。

その日、彼は、島の奥地のジャングルで激しい戦闘に巻き込まれました。戦いの中で友軍にはぐれ、一人きりになった彼は、熱帯の木々の間に砲弾が開けた大きな穴を見つけ、そこに飛び込みます。兵隊たちの間では、一度砲弾が落ちた場所には二度と砲弾は落ちてこない、というジンクスが信じられていたのです。

“天使の時間”が訪れたのは、ちょうどその時でした。先ほどまでの激しい戦闘が嘘のように、辺りには静寂が満ち、折からの燃えるような夕焼けが穴の入り口をオレンジ色に照らします。その時です。彼は突然、日本語で話しかけられました。

「日本は、どの方角ですか？」あまりに突然のできごと、彼は心臓が止まるほど驚きました。薄暗い穴の中、声のした方に目をこらすと、そこにはうす汚れた軍服を着た、中年の日本兵が地べたに腰を下ろして夕焼けを眺めているのです。自分一人と思っていた穴の中には先客がいたのです。「日本は、どの方角ですか？」その兵隊がまた尋ねます。驚きがおさまった彼は、雑嚢（ぞつものう）から方位磁石を取り出し、日本の方向を確かめ、指さしながら「日本はこの方角です」と答えました。すると中年の兵隊はそちらに顔を向け、横顔を夕陽に染めながら、「私の故郷は〇〇県の××です。今ごろは稲刈りがはじまっているところです。妻や家族は、私の帰りを待っているのだろうか」と、まるで独り言のように、寂しくつぶやくのでした。

彼はその後、中年の兵隊に向かって、自分の故郷のこと、これまで経験した戦闘についてなど、あれこれ話していましたが、昼間の激しい戦闘の疲れもあって、いつのまにか眠ってしまいました。はっと気づくと、辺りは宵闇に覆われ、月がジャングルを照らしています。しまった、寝過ごした、と思い、彼はさっきの兵隊とともに急いでその場を脱出しようと、「おい！おい！」と声をかけました。しかし闇の中から返事はありません。おかしいと思った彼は手探りで穴の中を移動し、先ほど兵隊がいたあたりを見回しました。すると、そこにはボロボロになった軍服をまとった一体の白骨が、かすかな月の光を浴びて横たわっていたそうです。

彼は、「ああ、あの兵隊は霊魂となって日本に帰ろうとしていたのだな。どうか迷わずに、日本の方角に進んで行ってくれ」と心の中で念じた、ということです。

上記の話は、本当にうろ覚えなので、多少の脚色を含みます。原作と違っているところもあるかと思いますが、大筋はほぼこのとおりです。たくさんの人命が失われた戦争を題

材とした悲しい怪談はたくさん耳にします。

“夢”の内容をオムニバス形式で描いた黒澤明監督の映画『夢』には、自分たちが全滅したことを理解していない旧日本軍の部隊が、かつての上官の前に、トンネルの中から亡霊となって現れる、という話があります。整列して捧げ銃（つつ）をする亡霊となった部下たちを前に、上官は涙ながらに「貴様たちは、もう死んでいる。この世にいてはならん。迷わずにあの世へ行け。これは命令である！」と命じます。「回れ右！進め！」と上官が号令をかけると、亡霊たちは向きを変え、ザッザッと軍靴を響かせながら、もとのトンネルの中へと消えていくのです。上官は敬礼して、亡霊たちの後ろ姿を見送ります。青白い亡霊たちの顔は常に無表情で、不気味さと哀しみが入り交じった不思議な映像美が印象に残っています。

「本当にあった」話をもう一話。これは、筆者自身の体験です。

世の中には、いわゆる“見える”人がいると聞きます。筆者は、残念ながら1ミリも見えませんが、57年間生きてきて、ミスターお化けやミス幽霊には一度もお目にかかったことがありません。もしも幽霊が実在するなら一度くらい見てみたい気もしますが、見たら見たで怖いだろうなあ、と想像すると、やっぱり見たくないとも思います。

そんな筆者ですが、間接的に不思議な体験をしたことがあります。最後にその話をしましょう。

かつて茨城高校は研修旅行で毎年、沖縄を訪れていました。その大きな目的のひとつが平和学習です。沖縄戦の資料館を訪れたり、ガマと呼ばれる、戦争中に人々が避難した鍾乳洞を見学したりという活動が、研修旅行には必ず組み込まれていました。平和学習のひとつに“語り部体験”があります。実際に沖縄戦を経験した方から、戦争中の経験などを聞かせていただく、というものです。

今から十数年前、筆者は学年主任として高校2学年を引率し沖縄を訪れました。いよいよ明日は研修旅行最終日という日の夕食後、語り部体験が行われました。宿泊していたホテルの大きな宴会場に生徒たちを集めて、戦争体験者のお話を聞きました。その日の講師は、年配の女性の方でした。非常にお元気な方で、身振りを交えながら米軍の艦砲射撃の激しさや、知人が亡くなった時のお話を聞かせてくださいました。

約1時間の講話が終わって、解散となった後、数人の生徒たちが筆者のもとに集まってきました。何かと思っていると、一人が「先生、今の講話の最中、BGMを流していましたか？」と真剣な様子で聞いてきます。何のことかわからず、筆者が「？」という顔をしていると、彼は「さっきの講話の間、ずっと歌が聞こえていました」というのです。一緒に来た生徒たちもうなずいています。それを聞いた他の生徒たちの中からも、自分も確かに歌を聞いた、という生徒が何人も出てきました。ちなみに筆者には何も聞こえませんでした。

最初、生徒たちが示し合わせて筆者をかつごうとしているのかな、とも思いましたが、彼らの真剣な様子を見ると、どうもウソではなさそうです。「どんな歌だった？」と聞いてみると、多かったのが「幼い子ども、たぶん男の子が、童謡のような歌を歌っていた」という答えでした。歌詞までは聴き取れなかった、ということです。後で調べておくから

